兼好法師の言語行動論

林　　四　郎

序　言語行動を見る目
1.　言語行動に話し手がどう表われるか
　1.1　人がらを表わすもの言い
　1.2　心情の制御
　1.3　話し手の心の中
2.　相手への働きかけがどう表われるか
　2.1　相手を支配する言語行動
　2.2　相手に支配される言語行動
　2.3　相手に支配されない言語行動
3.「はなし」に托された機能をどう見るか
　3.1　ジャンルの好み
　3.2　あだ名への執着
　3.3　なぞなぞの遊び
　3.4　もの言いの芸術
　3.5　宣言の機能
4.　ことばが運ぶ情報の価値をどう見るか
　4.1　情報の価値
　4.2　発言内容の自信
　4.3　発言内容の余裕
5.　言語行動の場面論
　5.1　理想的な談話場面
　5.2　閉じた場面
　5.3　接触だけの機能
　5.4　ゆがんだ場面
6.　伝達の流通回路

6.1　通じる心
6.2　書きことばの力
6.3　社会的流通回路
7.　言語の注釈機能について
結び

序　言語行動を見る目

つれづれ草の中には、著者兼好の評論という形においても、行動の描写の形においても、実にさまざまな角度から、言語行動について言及がなされている。専ら、言語行動論とか、コミュニケーション論とかに観点をすえて、つれづれ草に何が書いてあるか、兼好が何を論じているか、跡づけてみたい。

言語行動ということを考えるについては、例によって、ロマン・ヤコブソンの、六要素六機能説から出発することとする。

(referential function)
CONTEXT

(poetic function)
ADDRESSER ..... MESSAGE ..... ADDRESSEE
(emotive function)　　(conative function)

CONTACT
(phatic function)
CODE
(metalingual function)

(物運び機能)
内　容

(鑑賞機能)
話し手 ..... はなし ..... 聞き手
(心情機能)　　(指令機能)

つながり
(連帯機能)
ことば
(注釈機能)

上の図はヤコブソンの描いた要素の図と機能の図とを、いっしょにしたもの。下の図は、私のことばでそれを置きかえたものである。

「話し手」から「聞き手」へと「はなし」が運ばれる。はなしが運んでいるものは、実は「内容」である。はなしと内容とが運ばれることを通して、話し手と聞き手との間に「つながり」ができる。そして、以上のことが行なわれているときに、当事者間で、いちばん忘れられているのは、二人に共通な「ことば」である。このことばが、二人の間で完全に共通なら、二人は、それを、ことばと意識しない。しかし、実際には、ことばが完全に同じではないから、どこかに、聞きとがめの要素がでてくる。そのとき、「そのことばはどういうことばか？」という注釈の機能が発揮される。

このように、各要素にともなって、その要素が中心となる機能が働く。話し手が顔を出す機能は、話し手の心情発露の機能である。聞き手が焦点となる機能は、聞き手を動かす指令機能である。はなしがそれ自身の価値を発揮するのは、鑑賞機能である。はなしの運ぶ内容が中心となる機能を、物運び機能と言っておこう。二人の間につながりができることを重視する機能を連帯機能とする。これに、ことばにこだわる注釈機能が加わって、六要素に対応する六機能が観察されるわけである。

ヤコブソンには関係なく、時枝誠記氏は、言語の機能を、実用的機能、鑑賞的機能、社交的機能に分けた。物運び機能が実用的機能に当り、鑑賞機能は、そのまま鑑賞的機能であり、連能機能というのが社交機能に当る。

さて、その連帯機能のところに、デル・ハイムズの考えを借りて、処置を施したい。つながりということを、二人を包む場面と、二人をつなげる流通回路とに分けるのである。場面なくして言語活動が成り立たないのは明らかなことで、時枝氏の言語過程説は、言語主体、素材、場面の3概念から発している。流通回路とはchannelといわれるもので、コミュニケーション論では大変大事な概念である。つながりを場面・流通回路に分けると、機能の方も、連帯機能を二つに分化させなければならなくなるが、それを考えることは、この小論の関心事ではないので、その論には入らぬこととする。

機能のことは、ヤコブソンに触れて述べただけで、以下、特に機能のことを論ずることはしない。これから兼好の言語行動論を見ていくについて、言語行動の要素として、ヤコブソン、ハイムズから借りた7要素を観察の拠り所とし、次のように問題を設定する。

1. 言語行動に話し手がどう表われるか。
2. 相手への働きかけがどう表われるか。
3. 「はなし」に托された機能をどう見るか。

4.　ことばが運ぶ情報の価値をどう見るか。
5.　言語行動の場面論。
6.　伝達の流通回路の論
7.　言語の注釈機能について。

各項の表現形式がやや不ぞろいではあるが、このように分け、以下、この七つの観点から、つれづれ草の中の言語行動論を見て行こう。

つれづれ草の本文を引用するときは、北村季吟の『文段抄』による。本は、鈴木弘恭の訂正増補になる『訂正増補徒然草文段抄』（明治27年初版、同年訂正2版、青山堂書房）の大正5年の版を用いる。

1.　言語行動に話し手がどう表われるか

1.1　人がらを表わすもの言い

話しには、言うまでもなく、話し手自身のすがたが表われる。兼好にとって、このことは大変大事であったと見えて、「いでや。この世にうまれては。」と打って出て「ねがはしかるべき事」を記した第1段の文章の中に、早ばやと、「物うちいひたるきゝにくからず。愛敬ありて。詞おほからぬこそ。あかずむかはまほしけれ。」という叙述が出て来る。ことばがやたらと多くなく、むしろ少なめであって、しかし、言うときの言いかたは聞きにくくなく、態度全体に愛敬がある――というような話しのあり方、話しへの、そんな人がらのでかたが、兼好にとって、いちばん望ましいものであったのだろう。「愛敬（あいぎょう）」の内容が何であるかは、なかなかむずかしい問題であるが、なれなれしくない親しみやすさというようなものであろうと思う。この叙述にすぐ続く「めでたしと見る人の。心おとりせらるゝ本性みえんこそ。くちをしかるべけれ」とあるのは、おそらく、物を言っているうちに、その人の「心おとりせらるゝ本性」が見えて来てしまうのは残念だと言っているのだろう。もの言いの技巧とか何とかいうことでなく、本人の人がらとか教養とかいうものがおのずとあらわれることを最も重視していることがわかる。

79段には「何事も入たゝぬさましたるぞよき」というくだりがあり、物知り顔にものを言うのは田舎っぽい所業であって「よくわきまへたる道には。必口おもくとはぬかぎりはいはぬこそいみしけれ」とある。これは、人がらというよりは、知識の深さとその見せかたの問題で、できるだけ外に見せないという方針である。「良賈は深く蔵して虚しきが如し」とか「能ある鷹は爪をかくす」

という平凡な処世訓だといえば、そうであるが、四十余年の人生を経てきた兼好がつくづく感じていたことの一つは、このことだったにちがいない。

また、234段には、重ねて、「よろづのとがあらじと思はゞ。何事にもまことありて人をわかずうやうやしく。言葉すくなからんにはしかじ」と言って、ことば少なの徳をたたえている。ことに、若くかたちよい人は、その辺を気をつけなさいと言う。

つれづれ草に女性論がかなりあることは、だれにも目につくことである。そして、現代の女性を憤概させるようなことばかり言っているわけだが、ことに「女の性は皆ひがめり」と言って悪口の限りを言う107段の記述の中に、「くるしからぬことをも。とふ時はいはず。用意あるかとみれば。又あさましき事まで。とはずかたりにいひ出す」とあるのは、「問うに落ちず語るに落ちる」ということわざとも通じることで、物言いにおけるセルフコントロールのむずかしさをいうものであろう。

37段「朝夕へだてなくなれたる人の。ともある時。我に心おきひきつくろへるさまに見ゆるこそ。今更かくやはなどいふ人も有ぬべけれど。なほげにげにしくよき人かなとぞおぼゆる。うとき人のうちとけたる事などいひたる。又よしと思ひつきぬべし」というのは、人と人との間の心の通じ合いの問題で、後述する第6項目の問題であるが、言う人の人がらが、日常生活の連続の中で、時に、ひょっと物言いの調子を変えることによってどう出るかを論じたものでもある。

1.2　心情の制御

107段では女性の自己制御のなさを論じた兼好であったが、36段では、そういう制御のみごとな実例を語っている。「久しくおとづれぬ頃。いかばかりうらむらんと。我おこたりおもひしられて言葉なきこゝちするに。女のかたより。仕丁やあるひとりなどいひおこせたるこそありがたくうれしけれ」とある。

この女性は、心のうちでは長い無沙汰をうらんでいるにちがいないのに、そういうことには触れないで、下働きの人手をひとり回してくれないかと言ってきた、その心しらいを何ともいえなくうれしく思ったのである。

106段には、また、おかしな話がのっている。高野の証空上人が道で馬に乗った女と行き違うときに、すれちがいそこなって堀へ落ちた。上人は女の馬方をののしったが、変な理屈で言ったので馬方は、「何をおっしゃったのかわかりません」と、きょとんとしている。上人は、ついに「非修非学の男」とどなってしまってから、「きはまりなき放言しつとおもひける気色にて。馬ひきかへして

にげられにけり」となる。徳の高い上人ともあろう人が、他人の馬方に「この無学ものめ！」とどなってしまったので、おそらく、その恰好わるさにたえられなかったのであろうが、兼好は、上人が「きわまりない放言をしてしまった」と反省した様子で、馬首をめぐらして逃走したと描く。そして「たふとかりけるいさかひなるべし」と批評する。これが何でとうといのかという解釈に、文段抄の注は、貞徳の評を引いて、相手が女性なのに、それに愛着の念をもつことなく荒いことばでののしったのが出家としてえらいのだと解いている。この解釈も傑作だとは思うが、まあ、ここは、そういう道心をほめているのではなく、物言いの自己制御はできなかったが、できなかった自分を恥じることはできた人、それを、逃げ去るという行動に無邪気にあらわした上人の人間らしさを、とうとく思ったのだと解きたい。

1.3　話し手の心の中

話し手の心の中には、実にさまざまなケースがあるということを、194段では、語っている。人が、うそを言って聞く人をたばかろうとするときに、という変った状況設定をした上で、その聞き手に回った人が、次に自分が話し手となって、どんな心からどんなことばを出すかという屈折した設定を、あえてしている。

①すなおに信じて言うままに計られる人
②信じすぎて自分でも一層うそを添える人
③何とも反応しない人
④半信半疑で案じている人
⑤信じ込みはしないが、「そんなこともあるか」ぐらいに思ってすます人」
⑥わかっているような顔で聞いているが、何もわかっていない人
⑦そんなことだろうが、間違いもあるかもしれないと怪しむ人
⑧何のことはないじゃないかと片づける人
⑨からくりはわかっていても、知らん顔で聞いている人
⑩すべてを知った上で、うそをつく人に合流して、自分もうその片棒をかつぐ人

こう並べると、ただ、聞き手としての反応だけのように見えるが、②と⑩にははっきり現れているように、聞いたことを心に取り入れて、自分の物言いにどう展開するかのさまざまな心構えが、ここにあるように思う。③の反応しない人、⑥の何もわかっていない人は、おそらく、次に自分が語り手になることをしない人であろう。そのほかの人は、次の機会に話しそうである。①のすなおに計られた人は、純真に、そのまま話を伝えるだろう。②は、話に輪をかけ

て大きくする人。④は話すときの状況次第でどうにでも変る人。⑤は、まずそのまま話し、もしうそだとわかったときには「だから、はじめから変だと思っていたんだ」とか言ってつくろう人だろう。⑦は、かなり用心深く、疑わしさを表に出して話しそうである。⑧は、何かの折りに、ふと思い出したように、「ああ、こんなこともあるよ」と、どうでもいいように言う人。⑨は、いちばんのしたたか者で、最初からうそをばらすかもしれず、自分もうそを伝えた方が得だと思えば、まことしやかに話すだろうし、いろいろに状況を作り出していく人にちがいない。⑩はデマゴーグだが、人の上には立たない人であろうか。と、まあ、これは、私の勝手な想像であるが、兼好が、ここに、話し手の話しに臨む心構えというものを、人がらにからめていろいろに設定していることに興味を感じるのである。

236段は、直接に言語行動を語ってはいないが、心とは何かということを論じて、「我等がこころに。念々のほしきまゝに来りうかぶも。心といふものゝなきにやあらん」という結論を得ているのが貴重である。鏡には色も形もないから、すべての物の姿をうつすことができる。それから考えて、心に何でも浮かべることができるところをみると、心は空で、存在しないのかも知れないというのである。

そういう、むなしかるべき心が、いろいろ、人をたばかるような物言いをするのは、主なき家に入って来る、けしからぬものどものしわざということになる。私たちは、そういう心をもって毎日の生活と毎日の物言いをしているわけである。してみると、話しに話し手の人がらが出るとか、自己の制御が必要であるというのは、私たちに、心以前の、もっと本源的な生命があるということになるであろうか。何だか、フロイトのリビドーのようなものを考えたくなる。が、それは、兼好とは関係のないこと。

2.　相手への働きかけがどう表われるか

2.1　相手を支配する言語行動

107段に女性の悪口が大いにあることを述べたが、それは、宮中で女房たちが、参内する若い男をひとりひとりつかまえて「時鳥や聞たまへる」とたずね、その返事をいろいろに品評などしていることへの腹立たしさから出たことである。このように、答えかたを品評する目的で質問をするというのは、本当にわからないことを知りたくて質問するのとは全くちがって、相手を、いいように

舌先で転がしているわけで、まさに奥女中的発想で男たちを支配している一つのすがたである。宮廷という場を利用して、こういうゆがんだ言語行動を楽しむとはけしからぬことで、「すべてをのこをば。女にわらはれぬやうにおふしたつべし」という教えまで、大まじめに伝えられるとは、おどろきである。

129段は、「顔回は。志人に労をほどこさじとなり」とあって、兼好の人道的精神がうかがえる段であるが、そこに「いときなき子をすかしおどしいひはづかしめて興ずる事あり」と言い、「をさなき心には身にしみておそろしくはづかしくあさましき思ひ。誠に切なるべし。是をなやまして興ずる事慈悲の心にあらず」と同情する。この状況をもっと具体的に描いているのは175段で、酔った者の醜態を痛烈に描写する中の一つ、「年老袈裟かけたる法師の。小わらはのかたをおさへて。聞えぬ事どもいひつゝよろめきたる。いとかはゆし」とある。「かはゆし」は、法師のくせに何たることかとあさましく、かえって同情されると解く注釈もあり、からまれている小童がかわいそうだと解く注釈もあるが、どちらでもよい。無抵抗な子どをいいカモにして、おどしたり、からかったりする中老年男子の所業を、筆者兼好が、憎んで見ていることは確かである。ここにも、相手支配の言語行動がゆがんだ形でなされることへの、兼好の非難を見る。

235段に、すなおでない返事のしかたを非難するくだりがある。「人の物を問たるに。しらずしもあらじ。ありのまゝにいはんは。をこがましとにや。心まどはすやうにかへりごとしたる。よからぬ事なり。しりたることもなほさだかにと思ひてや問らん。又まことにしらぬ人もなどかなからん。うらゝかにいひきかせたらんは。おとなしく聞えなまし」。人にものを聞かれて、すなおに返事をしたのでは、見くびられるとでも思うのか、知っているのか知らないのかわからないような、けむに巻くような答えをして粋がっている人を非難しているようである。物知り貴族たちの中には、きっと、そういう一筋縄ではいかない人たちがいただろう。そういう人のそういう物言いへの非難と見たい。

2.2　相手に支配される言語行動

相手を支配する言語行動があれば、当然、その支配を受ける側に立つ言語行動がある。141段には、東国の荒武者の出である堯連上人が、都の人は実がないと言って非難する同郷の人に同調せず、都の人が実がないのではない、都人は心がやわらかで情があるから、人の言うことを簡単に退けられず、つい、引き受けてしまうために、結局、約束が守れなくなるのだ、はじめからうそを言うつもりではないのだと言って弁護する話がある。荒々しい田舎者だと思ってい

た上人が都人のせんさいな心を理解しているのに兼好はおどろいたのである。人にものを頼まれたりすると、成算がなくても、つい引き受けてしまうのは、相手の要望に支配されることであって、これを都会的人間の特徴と見たのは、堯連上人と兼好との一致した観察である。この親察が究極的に正しいかどうかは知らないが、そういう一面は確かにある。

人と話し合っていて、相手の心の方向に支配されることのあじけなさを最も真実感を以て語っているのは12段である。同じ心の人としめやかに話ができたなら、こんなうれしいことはないが、世の中にそんな人はありそうもない。となると、「露たがはざらんとむかひゐたらんは。ひとりあるこゝちやせん」という。ついつい、相手の気持ちにそわなければならなくなって、自分がどこへ行ったのかわからない状態になるのは、実に索漠たるものである。人といっしょにいながら「ひとりあるこゝち」というのは、その索漠感を非常によく表わしている。

2.3　相手に支配されない言語行動

相手に支配されることがあじけないならば、相手に支配されないことは気持ちのよいことでなければならない。それならば、141段の堯連上人が、心弱い都人と対比してとらえた東国人の心はどうなのであろうか。「あづま人は。我かたなれど。げには心の色なく情おくれ。ひとへにすぐよかなるものなれば、はじめよりいなといひてやみぬ」。できないものはできないと、はじめから断れば、人をあざむく結果にはならないので、それは、人に支配されず、すがすがしいことなのであるが、そういう突っぱねる心を堯連は「心の色なく情おくれ」と言っていて、理想の状態と見ているようには思えない。

兼好が、自分のことばで、人に支配されないすがすがしさを語っているのは75段である。「つれづれわぶる人は。いかなる心なるらん。まぎるゝかたなくただひとりあるのみこそよけれ。世にしたがへば。心外の塵にうばゝれてまどひやすく。人にまじはれば。言葉よその間に随ひてさながら心にあらず」という、これである。「つれづれ」というのが「退屈」でも何でもなくて、心が外の何物にも占領されていない、完全に自由な状態を指すのだということが、これでよくわかる。つれづれこそ、天上天下唯我独尊と言ってもいい理想境であるのだ。人に支配されないとは、人を突っぱねて心地よく思ったり、人を支配することによって、人に支配されない自分を確認したりすることではない。18段に、もろこしの許由が、身に一物もたくわえず、人がくれた瓢箪も、風に鳴ってうるさいと言って棄ててしまったのを「いかばかり心のうちすゞしかりけん」と礼

賛している。これは言語行動について言っているのではないが、自分を無の世界に解き放っている人の心を、この上なくすずしいものと見た兼好にとって、それは、つれづれの理想境と全く同じものであるにちがいない。

兼好は、法師たる者が貴顕に交じって羽振りよくすることを好まない。76段に、そういう感想を述べて「さるべき故有とも法師は人にうとくてありなん」と言っているのは、人にうとくてあることが、法師のつれづれを保障するからであろう。

3．「はなし」に托された機能をどう見るか

ここでいう「はなし」とは、話の内容のことではない。言語作品の形式のことである。ヤコブソンは message form という。作品形態とか、作品の美的価値とかに関連していく面についてのことである。兼好は、この方面に非常に関心が深かったから、ここには、特に言うべきことが多い。

3.1　ジャンルの好み

言語作品にとって、まず、ジャンルが問題である。兼好は歌人であるから、もちろん和歌を好む。14段に「和歌こそなほをかしき物なれ。あやしの。しづ山がつのしわざもいひ出つれば。おもしろく。おそろしき猪のしゝも。ふすゐの床といへば。やさしくなりぬ」とあるのは、和歌の形式のおもしろさを称揚しているので、現代人には到底言えない類のことであるが、和歌というジャンルの性格として、これは、やはり大事なことである。

このほか、同じ段で、梁塵秘抄の郢曲をほめ、16段で神楽をほめている。神楽は言語作品とはいえないが、関係はある。

3.2　あだ名への執着

兼好はあだ名に非常に興味をもっていた。たしかに、あだ名は民衆が作ることばの芸術であり、興味をもつに価するものだ。

45段の榎の木の僧正の話は、あだ名の話として傑作である。「榎の木の僧正」から「きりくひの僧正」、さらにまた「堀池の僧正」と、三つのあだ名をかちえたのは冥加なことであったが、良覚僧正は、それが我慢できなかった。どの名も、いやな名ではないし、ばかにした感じでもないのに、それを「此名しかるべからず」と思い、「いよいよはら立て」すぐ処理をしなければ気がすまなかった僧正は、よほど、あだ名のねうちがわからなかった人である。そういうのが「はらあしき」人なのだということを、つれづれ草は教えてくれる。

続く46段もあだ名の話で、これは、たびたび強盗に入られて、被害者である坊さんに「強盗法印」というあだ名がついたのである。「柳原の辺に強盗法印と号する僧有けり。たびたび強盗にあひたるゆゑにこの名をつけにけるとぞ」。この「つけにける」を「つきにける」と伝える本もある。つけたのか、ついたのかで感じが変るが、だれかがつけたからついたのにちがいない。「強盗法印と号する」という言いかたからも、いろいろなことが思われる。
◎だれかがつけたから、そういう名になった。
◎だれかがつけたから、自分でもその気になって、そう称した。
◎だれ言うとなくついた名だから、ありがたくいただいて、そう称していた。
◎自分でそういう名をつけて、そう名乗っていた。
などの場合が考えられる。どの場合にも、それぞれの意味がある。とにかく、榎の木の僧正の場合と、あだ名の受けとめかたが大変ちがうところが兼好の目に興味ふかく映ったのだろう。

あだ名をつけた人の話があるのは60段である。真乗院の盛親僧都は奇行を以て鳴る名僧である。彼がどんなに芋がしらが好きであったかを、数々の実話で描いたあとに「此僧都ある法師を見てしろうるりといふ名をつけたりけり。とは何物ぞと人のとひければ。さるものを我もしらず若あらましかば。此僧の顔に似てんとぞいひける」と、あだ名を創作した話をつけ加えている。

あだ名というものは、たいていは、自然につくものとしてとらえられるが、ここに、はっきりと、つける立場でとらえてあるのがめずらしい。しかも、実在しないものを感じで作り出してあだ名にしたというところが、いよいよめずらしい。

3.3　なぞなぞ遊び

言語作品の一つの結晶はことば遊びであり、ことば遊びの、また一つの結晶は、なぞなぞである。62段に、延政門院幼時の歌「ふたつもじ牛の角もじすぐなもじゆがみもじとぞ君はおぼゆる」が「こひしく思ひまゐらせ給ふとなり」との解答つきで紹介してある。当の延政門院にとって、これが遊びであったか、切実な心情伝達であったか、それはわからないが、これが、ことば遊びのよい例であることにはちがいがない。兼好は、自分でも、米や銭の無心をする文句を各句の首尾に置いた和歌を作って(「夜も涼し寝覚の垣ほたまくらもま袖も秋に隔てなき風」)、友人頓阿に送ったりしているくらいだから、こういった遊びの歌作りに興味をもっていたことは確かであろう。

103段には、「くすし忠守」なる者が大覚寺殿で「我朝の者とも見えぬ忠守か

な」と、なぞなぞをかけられ、人がそれを「唐瓶子（からへいし）」と解いて笑ったのに腹を立てたという話がのっている。かつて平忠盛が「伊勢へいし」とからかわれたことがあるのと、忠守自身がふだんから唐人ぶった言動をしていたこととをひっかけたなぞなのだそうだが、貴族たちは、めんどうななぞを作って遊ぶものである。こういう遊びを、笑って聞き流せなかった忠守の不粋さを非難する口吻があるのだと解く注釈もあるが、解釈はどうでもよい。兼好は、解釈を人に押しつけない人だから、読者としても、事実だけを受け取って、解釈は、兼好とは別に、各自することにしよう。

135段には、また、本当に、後世の人にも解けていないなぞがある。どんな問いにも答えてみせると豪語した資季大納言入道が具氏宰相中将に「むまのきつりやうきつにのをか。なかくぼれいりくれんどう」ということの心を聞かれて答えられなかったという話である。この解答は兼好も示していないから、後世の注釈者がさまざまに推測を重ねている。

3.4　もの言いの芸術

その場で言ったことが当意即妙でまことにみごとである場合、これを興言利口といって尊んだことが『古今著聞集』の部立てからもわかる。

86段に、惟継中納言が三井寺の円伊僧正に「いみしき秀句」を言ったことが記してある。三井寺の僧は「寺法師」と言われており、円位もそう呼ばれていたところ、文保のある年に三井寺が焼けた。それで惟継が円伊に「御坊をば。てら法師とこそ申つれど。寺はなければ。今よりは。ほうしとこそ申さめ」と言ったのである。

90段には、名言だか何だかわからない答えがある。大納言法印の召使い乙鶴丸が、やすら殿という者とねんごろになって行き通っていた。法印は、ある時、乙鶴丸が帰って来たところをつかまえて、どこへ行って来たかときくと、正直に、やすら殿のところと答えた。「其やすら殿は。男か法師かと又とはれて。袖かきあはせて。いかゞ候らん。頭をば見候はずと答申き。などか頭ばかりのみえざりけん」とある「頭をば見候はず」は秀句なのかどうか、わからない。見えないはずのない頭を「見ませんでした」と答えたのは、苦しまぎれなのか、シャーシャーとしてなのか。あまりにも見えすいたうそだから、かえって愛敬があるということであろうか。

前に言及した107段の、女房たちの問いかけテストに対する答えは、どう評価されただろうか。「時鳥や聞たまへる」という問いに「数ならぬ身はえきゝ候はず」と答えたのには「数ならぬ身」というところを「むつかし」と判定し、「岩

倉にて聞て候ひしやらん」と答えた堀河内大臣の答えは「是は難なし」と判定された。「むつかし」は「いやみだ」ということであろうか。やはり、さらりと受け流すのがいいとされているようである。

142段に「心なしとみゆる者も。よき一言はいふものなり」という「よき一言」は、子どもをもたない人には、もののあはれはわからないだろうと、ある荒夷が言ったことをさしている。これは真に内容的な「よき一言」で、興言利口的なものとはちがうようであるが、本当に心を打つひとことは、それこそが真の名言なのだから、それが最高の芸術であろう。

145段と146段に、人相見のうがったことばが見える。秦重躬は入道信願を落馬の相ある人と見た。果して信願は落馬して死んだ。どうしてわかったのかと人が聞いたら、「きはめて桃尻にして沛艾の馬を好しかば。此相をおほせ侍りき」と答えた。別に、顔に現れていたわけではなく、鞍にすわりの悪い尻をしていながら、じゃじゃ馬好みであることから見て、どうしても落ちることになるという単純な推理に過ぎなかった。また、明雲座主は、座主という高位にありながら、自分に兵仗の難があるかと相者にたずねた。相者は、その相があると答えた。相者の推理は、「傷害のおそれおはしますまじき御身にて。かりにもかくおぼしよりてたづね給ふ。是既に其あやぶみのきざしなり」ということであった。これも、その通りの結果で、明雲は矢に当って死んだ。座主ともあろう人が自分からそんなことを心配して人に聞くことが、何よりその恐れがある証拠だというわけで、これは、まさに名言である。前者は理づめの物理的推理、後者は、あざやかな心理的推理で、ともに、ジャーロック・ホームズを思わせる名推理だ。

175段では、酒飲みの醜態を大いにあばいたあと、よい酒の飲み方を並べる。その一つに、「旅のかり屋。野山などにて。御さかな何などいひて。芝の上にて飲たるもをかし」というのがある。「御さかな何」は何か歌の文句であろうが、そんな他愛もないことを口ずさむことが酒に興をそえることなのである。

143段では人の死に際を論じている。高徳の人でも、死に際を劇的にすることはできないのだから、それを語り伝える人が、変に美化して語るのは、ひいきの引き倒しになるという趣旨である。「ただしづかにしてみだれずといはゞ。心にくかるべきを」というのが兼好の言いたいところ。私たちの日常生活の中で、口から出ることばがみごとな言語作品になることなど、めったにないのだから、ちょうど臨終のときに、うまいことばが出て来ることも少ないはずだ。だから、死に際は、静かで乱れずというのが最高のほめことばになるのだという。これ

は極めて現実的な議論である。

167段と168段では、いかにも消極哲学であるが、私などは本当にそうだと思うことを述べている。自分の専門外のことに接しているとき、「これが自分の方面のことだったら、こうしてだまってはいないのに」など思ってじりじりするのは下の下で，そういう時に「あなうらやましなどかならはざりけん」ということばがすなおに出て来るようでありたいという。「いひてありなん」は、言っておけば無難だというようなずるいことばではなく、そうありたいという切実な希望だと私には感じられる。また、たとい、一道にすぐれた人でも、年を取ったら、知った顔をしないで「今はわすれにけり」と「いひてありなん」という。これも、ずるさが生むことばではない。年相応の言動があるという言語美学から出ることばであろう。

135段と136段は、何でも答えて見せると高言した人が答えそこなって面目を落す話である。前者は、前になぞなぞで言及した「むまのきつ……」という変な歌につまづき、後者は、「しお」という字は何偏かという問いに「土偏」と答えて教養のなさを暴露する。これらでは、あざやかな答えをしてみたいというあこがれなどもつと、ろくなことはないと言っているように思える。

231段の百日の鯉の話は、心理的にやや入り組んでいる。園の別当入道は包丁使いで知られていた。ある人の所でみごとな鯉が出た。人々はその座にいる入道の腕前を見たいと思ったが、たやすく注文もできかねている。すると、入道が「此程百日の鯉をきり侍るを。今日かき侍るべきにあらず。まげて申請ん」と申し出て鯉を切った。人々は入道のこの言い方をほめたが、あとでそれを伝え聞いた北山太政入道は「おのれはよにうるさく覚ゆるなり。きりぬべき人なくはたべ。きらんといひたらんはなほよかりなん。何条百日の鯉をきらん」と言った。別当入道としては、自分が名人と自認しているように思われてはならぬとの配慮からだったのだろう、「今百日の鯉を切っていて一日も欠くことができないので、その鯉は是非私に切らせていただきたい」とまるで修行中の若い者が願い出るような言い方をしたわけである。太政入道に言わせれば、そんな見えすいたうその理由を作るのこそもったいぶったやり方だ、すなおに「私がやりましょう」と言えばよい、というわけである。兼好は、無論太政入道に賛成で、この批評を「いとをかし」と見る。兼好は、仁和寺の僧たちのばかげた遊びを評して言うように(54段)、「あまりに興あらんとする事は必あひなきもの也」と思っているから、巧んで恰好をつけた「百日の鯉」には賛成できないのである。

113段に「おほかた聞にくゝみぐるしき事」を3箇条挙げているうちの2箇条は、ものの言い方で、第一は「老人のわかき人にまじはりて。興あらんと物いひゐたる」、第二は「数ならぬ身にて世の覚えのある人をへだてなきさまにいひたる」である。ともに、背のびして自分を恰好よく見せようとする物言いで、兼好が最も見苦しいとする類の行動である。

125段の話は、また、おかしい。人の四十九日の仏事に来てくれた導師の説法がよかったと人が感動していたら、ある者が、「何とも候へあれほど唐の狗に似候なんうへは」と、ぶちこわしなことを言ったので「あはれもさめて。をかしかりけり」という。「をかしかりけり」と兼好が言うのだから、この「ある者」の言を、けっこう、おもしろがっているのだろう。「さる導師のほめやうやはあるべき」と、最後に批判することばをつけているが、これは、まじめに批判しているとは思えない。世の中にはとんでもないことを言う奴がいるものだと、笑って手をたたいているような文の流れである。これは、人がありがたがっている雰囲気を平気でこわして、ずばりと、ある点からの真実をついた一言を、一種の名言と見ているように思える。「はだかの王様」に通じるものがあるようだ。

この話でもわかるように、兼好には、そらぞらしく人をほめたりすることばが大変耳にさわるらしい。152段は、「腰かゞまり眉しろく。誠に徳たけたるありさま」で参内した西大寺の静然上人を見て、西園寺内大臣が「あなたふとのけしきや」と信仰せんばかりであるのを、資朝卿が、いともあっさりと「年のよりたるに候」と片づけた話。この話をはじめに、資朝のさばさばした逸話を三つ紹介しているところから、兼好は、この人の行動にほれている所があるように思える。

ここに、やや続けて、もの言いの芸術といった面に注目している兼好の筆づかいを追ってきたが、この人は、本当に率直に出た一言が真実をついて胸にひびくとき、これを名言として大切にする一方、もったいぶっているとか、そらぞらしいとか、本人が名言を意識していると感じられる場合には、大変これをきらっていることがわかるのである。

3.5　宣言の機能

口から出た言語作品がそのままで大きな価値をもつものに、文学的な力のほかに、もうひとつ、宣言の力がある。宣言の機能については、J．L．オースチンが 'How to Do Things with Words' で説いたとおりで、議長の開会・閉会の宣言とか、決議事項とか、法律の文言などのように、現実を規制する力の

ある言語行動があるということである。

今、例にあげたような言語行動は、いずれも、社会がそう認める合法的な規制力をもつものであるが、宣言が呪文の方向へ発展すると、だんだんあやしげな世界へと入って行く。呪術的な行ないは兼好のくみしないものであるから、そういう話はあまり出て来ないし、あっても、からかうように紹介される。

54段で、好きな稚児を連れ出して遊びにうつつを抜かす仁和寺の法師たちは、自分たちでうずめた弁当を食おうというときに「験あらん僧達いのりこゝろみられよなどいひしろひて。埋つる木のもとにむきて。数珠おしすり。印ことごとしくむすび出など」「いらなく」ふるまうのである。狂言の山伏ものを見る思いで、呪文の効能とはこんなものだという例にわざわざ使っているようである。

有名な89段の猫又話は、連歌師何阿弥陀仏が自分に向けて発した宣言を実現させた話である。人を食う猫又がこのあたりにも出るという話を聞いて「ひとりありかん身は心すべきことにこそ」と思ったときに、彼は、夜ふけて一人歩くときには猫又が出ると、自分に宣言したことになった。現代のことばでいえば、自己暗示をかけたのである。

47段の話もおもしろい。清水に参詣する老尼が道々「くさめくさめ」と言っている。自分が養い育てた幼君が比叡山にいて、いつ、くしゃみをするかも知れない、その時にこう言ってまじないをしなければ、幼君が死ぬかも知れないからだと言う。こんなまじないを兼好が受け入れるはずはないのだが、それを「有がたき志なりけんかし」と、すなおに受け入れているのは、おそらく、まじないを受け入れたのではなくて、老尼の個人的な「志」をほめたのだろう。おろかでも何でも、養い子を思う心情は有難いものだ、ということであろう。

兼好らしく、迷信めいたものをやっつけている段が、少くとも三つはある。91段では、人が言う「赤舌日」というものを取り上げて、根のないこととする。「吉日に悪をなすに必凶なり。悪日に善をおこなふに必吉なりといへり。吉凶は人によりて日によらず」とは、まことに理性のことばである。206段では、いかめしいお役所に、牛がのこのこ入って来て長官の座にのんびりとすわってしまった。これを見て、何か凶事の知らせではないかと、人々はうろたえたが、あわてぬ人（太政大臣）がいて、牛を連れ出させ、畳を取りかえたら、たゞそれだけのことであったという話。207段の話は、亀山殿を建てる時のこと。土を掘ったら大きな蛇が数しらず集まっている塚があった。土地の神だろうと人々が恐れをなしたが、前段の話で腹の程を見せた同じ大臣が、「王土にをらん虫。皇居をたてられんに。なんのたゝりをかなすべき。鬼神はよこしまなし。とか

むべからず」と言って、構わず蛇を棄てさせた。案の定、何のたたりもなかったという。

どうやら、つれづれ草において、宣言的行動は、まともにいかめしい形では、一つも功を奏していないようである。

4.　ことばが運ぶ情報の価値をどう見るか

ここでは、ことばがもつ、いちばん普通の機能、情報を運ぶ働きについて、兼好が何を言っているかを見たいが、これについては、残念ながら、あまり、おもしろい記述が見られないので簡単に記す。

4.1　情報の価値

117段に、「友とするにわろき者」が七つあげてある第六に「虚言する人」とある。徳目とすれば、あたりまえだが、実際世の中にそらごとが多かったからだろう、「世にかたりつたふる事。まことはあいなきにや。おほくは皆虚言なり（73段）」と嘆じなければならなかった兼好である。

164段では、「世の人あひあふ時しばらくも黙止する事なし。必言葉あり。其事をきくにおほくは無益の談なり」と、一般人の無益のおしゃべりにまゆをひそめる。虚言と無益の談とは、とらえている面がちがうが、情報内容に価値がない点では共通している。

世俗の一般人がくだらぬおしゃべりに時をすごすのはしかたがないが、とかく法師までがと、一層まゆをひそめているのが77段で、世の中には、関係がないはずのことに、ばかにくわしい人がいて、よくまあ、ああも伝えて歩くものだと感心したあと「ことにかたほとりなるひじり法師などぞ。世の人の上は。わがごとくたづね聞。いかでかばかりはしりけんと覚るまでぞいひちらすめる」とあきれている。

4.2　発言内容の自信

ものを言って、それが真理の的をついたと自信がもてることがある。41段の話は、賀茂のくらべ馬を見たときに、木の上でいねむりをして落ちそうになる法師を見て兼好が言った――私たちもいつ死ぬかわからないのに、それも知らずに物を見て暮らしているのは、いつ落ちるかわからない、あのいねむり法師と同じことだ――ということばを聞いて、人々が妙に感心し、「まことにさにこそ候けれ。最おろかに候」と言って、兼好をいい席にすわらせてくれたという

もの。これは、自慢話なので、何となくてれくさいらしく、こんなことはだれだって知っていることだけれど「折からのおもひかけぬこゝちして。胸にあたりけるにや。人木石にあらねば。時にとりて物に感ずる事なきにあらず」と、無理に恰好をつけたような感じでしめくくっている。

57段では、人が語り出した歌物語の歌がよくない場合を例にして、「すべていともしらぬ道のものがたりしたる。かたはらいたく聞にくし」と評している。話の内容がわるくては、どうにもならぬということである。

4.3　発言内容の余裕

31段で語るのは、「いまはなき人」の回想である。雪がおもしろく降った朝に、その人の所に文をやったが、雪のことを何とも書かなかったら、「此雪いかゞ見ると一筆のたまはせぬほどのひがひがしからん人の仰らるゝ事聞いるべきかは。返々くちをしき御心なり」と、きついお叱りの返事が来たのが忘れられないという。こちらからの文の内容が事務的なものだったのか、心情的なものだったのか、わからないが「聞いるべきかは」と拒否しているところを見ると、何か、頼みか提案かを含んでいたのだろう。こちらにとっては、雪は当面のことでなかったから、何も触れなかった。ところが、それを受け取った人の価値観では、用事だけ書いてあって、雪の日に雪のことが書いてない文などは文のうちにも入らぬというわけである。この風流人は無論女性にきまっていると、ある人が教えてくれたが、私の不粋な感覚では、これが疑う余地なく女性であるかどうか、どうもよくわからない。

それはそれとして、運ぶ情報の内容だけが頭にあった人と、全体を包む雰囲気こそ手紙の生命だと思っている人とのちがいが、大きくここに出ているのがおもしろい。

5.　言語行動の場面論

話し手と聞き手との接触を中心にして、伝達と受容の行なわれる「場面」が発生する。この場面がどうあるべきかということについて、兼好は、微妙な観察をしている。

5.1　理想的な談話場面

兼好は、だれかがだれかに話をする場面について、どんな場面が最も望ましいと考えていただろうか。

56段に、この問いに対する絶好の答えが見られる。「よき人の物がたりするは。

人あまたあれどひとりにむきていふを。おのつから人もきくにこそあれ。よからぬ人は誰ともなくあまたの中にうち出で。見ることのやうにかたりなせば。皆おなじくわらひのゝしるいとらうがはし」というのが兼好の指摘である。人が大勢いても、一人に向いて話すのを、その場にいる人がおのずと聞くという話しかたが最高なのだと、彼は言う。自分から大勢の前にしゃしゃり出て、おもしろおかしく話をするのは「よからぬ人」のすることだという。

前にも言及した12段には、「おなじ心ならん人としめやかに物語して。をかしきことも。世のはかなき事も。うらなくいひなぐさまんこそうれしかるべきに。さる人あるまじければ。露たがはざらんとむかひゐたらんは。ひとりあるごゝちやせん」と明晳に述べている。話の成立する場面としていちばん望ましいのは「おなじ心ならん人」と向かい合うことだが、そんな人は得がたいのが現実だという。

これらの段に見える兼好の考えは、現代の私たちのそれとは大分ちがうようだ。public speaking という話のありかたは、中世日本の法師には当然のこと、考えられなかった。

5.2　閉じた場面

公共場面での開いた話し合いが考えにくかったということは、閉じた場面でのそれはめずらしくなかったということになろう。秘密結社のごときは最も閉じた場面を作り出すものであるが、つれづれ草からその方面の情報は得られない。ただ何となくそういう雰囲気を感じさせるものに、「ぼろぼろ」という無宿の集団がある。115段は宿河原におけるぼろぼろの仇討ちの話で、これは文学作品としての絶品に思えるが、それは、ここで論ずべきことではない。「梵字」「ぼろんじ」「漢字」などいわれる集団があって「世をすてたるに似て。我執ふかく。仏道をねがふに似て。闘諍をことゝす」という生活をしていたことがわかる。

108段は「寸陰をしむ人なし」と言って、生死の大事を知るべきことを説いている。その中に「謝霊運は。法華の筆受なりしかども。心常に風雲の思を観せしかば。恵遠白蓮の交をゆるさゞりき」という叙述がある。中国でのことで、日本の社会とは関係のないことであるが、白蓮の交わりは、高僧恵遠が、謝霊運ほどの人をも入れなかった交わりなのであるから、よほど資格の面倒な閉じた集団であったと見える。

5.3　接触だけの機能

接触することに意味があるという社交機能について、兼好はどう見ているだろう。

164段にいう。「世の人あひあふ時しばらくも黙止する事なし。必言葉あり。其事をきくにおほくは無益の談なり。世間の浮説。人の是非。自他のために失おほく得すくなし。これをかたるとき。たがひのこゝろに無益のことなりといふことをしらず」。世の人が顔を合わせれば必ずおしゃべりをする。その内容の大部分は、兼好には無益のことに思えた。この無益さは、運ばれる情報の内容から判断されているように思える。内容はくだらなくても、話している人同士の何かの触れ合いはあるにいがいない。その辺を兼好がどう見ているかは、わからない。

170段では、「さしたる事なくて。人のがりゆくはよからぬ事なり。用有て行たりとも其事はてなばとくかへるべし。久しくゐたるいとむづかし」と、無用の接触をいましめている。人と向かい合っていれば、何かと話をしなければならない。その内容は、結局、互いのために益のないことになってしまう。それに気づいても、迷惑らしい顔もできない。それがいやだと、彼は思っている。この気持ちは、私には非常によくわかる。

兼好が対話によって人との接触を楽しむことができるのは、結局、同じ心でありうる人と語る場合に限られるようだ。同じ段で、さらにつづけて彼は言う。「おなじ心にむかはまほしく思はん人の。つれづれにて。いましばし。けふは心しづかになどいはんは。此かぎりにはあらざるべし」と。ただひとりいて楽しむ「つれづれ」と同じ「つれづれ」の楽しみをわかち合える人が「おなじ心」の人なのである。そういう人と向かい合って、話をするでもなく、しないでもなく、時をすごすとき、それが、兼好が人との接触を楽しむ唯一のすがたなのである。「そのことゝなきに人のきたりて。のどかに物がたりしてかへりぬるいとよし」と続けて言うのがそれである。

5.4　ゆがんだ場面

兼好は、俗世の情報通を尊敬しない。78段では「今やうの事どものめづらしきを。いひゝろめもてなすこそ。又うけられぬ。世にことふりたるまでしらぬ人は心にくし」と、週刊誌の知識などを宣伝して回るような人に、彼はくみしないのである。そんな知識は、世の中で最後に知る人でありたいものだと、彼自身が本当にそんなに情報にうとい人であったかどうかはわからないが、好みとしては、そう思っているのである。そして、また、続ける。「いまさらの人などのある時。こゝもとにいひつけたることぐさものゝ名など。心得たるどち。かたはしいひかはし。目見あはせわらひなどして。心しらぬ人に心えずおもはする事。世なれずよからぬ人のかならずある事なり」

一団の人による会話場面ができているところに、新しく座に加わった人がある場面のこと。前からいる人たちの間では、既に話題の共通理解ができているから「心得たるどち」は、ほんの「かたはし」を言いかわすだけでわかる。その早わかりを楽しんで「目見あはせ」笑いなどしているが、新来の「心しらぬ人」にはわからないから「心えず」思うことになる。こんなやりかたをして平気でいるのは、「世なれずよからぬ人」なのだというのが兼好の見かたである。この点では、兼好の考えが、実に中世的でなく、全く近代的であるのに驚く。一座の新来者にそういう心えぬ思いをさせないことこそ、民主主義の基本的精神ではないか。

6. 伝達の流通回路の論

6.1 通じる心

すでに見て来たように、「おなじ心」ということばが、12段と170段とに出て来る。12段では、同じ心になれる人は「あるまじければ」と言って、現実のあじけなさをえがき、170段では、そんな人が来てくれて、のどかに物がたりする楽しさを述べている。

このような連帯をもたらす流通回路は、「つれづれ」の味を知る二人の間でないとできないようである。

しかし、37段に、「朝夕へだてなくなれたる人の。ともある時。我に心おきつくろへるさまに見ゆるこそ。今更かくやはなどいふ人も有ぬべけれど。なほげにげにしくよき人かなとぞおぼゆる。うとき人のうちとけたる事などいひたる。又よしと思ひつきぬべし」とあるのは、人生のおもしろい一面を見せてくれる。朝夕へだてなくして、ごく親しい人が、ある時ふと、その親しさを――というよりは、なれなれしさを引っ込めて、ちょっと他人行儀な様子をすることがあるという。そういうとき、ふつうの人は、変に思ったり、何かあるなと、かんぐったりするだろう。兼好は、そう見ないで、反対に、その時にこそ、その人を「よき人かな」と思うというのだ。なれなれしくしている時には感じない連帯を、相手が改まって「げにげにしく」した時に感じるという記述は、私たちも充分記憶にとどめる必要がある。

その反対に、ふだん疎い人が「うちとけたる事」などを言ったときに、はじめて連帯を感じる、というのは、だれもがよく経験することで、これは、めずらしくない。

6.2　書きことばの力

人と、めったに連帯を感じないらしい兼好に、いつでも連帯の約束される道が残っている。それは、書きことばの世界である。同じ心になれる人がいないことをなげいた12段につづく13段は「ひとりともし火のもとに文をひろげて。見ぬよの人を友とするこそこよなうなぐさむわざなれ。文は文選のあはれなる巻々。白氏文集。老子の言葉。南華の篇。此国の博士どものかける物も。いにしへのはあはれなる事おほかり」となる。目の前にいる現実の人びととは、めったに同じ心になることができないが、自分の心に合う、これらの巻々のことばは、本当に心の友のことばとして、わが心に流れこんで来るのである。

そして、やはり同じ心の人について言った170段の文言も、その人が「のどかに物がたりしてかへりぬるいとよし」と言ったあとが「また文も久しくきこえさせねばなどばかりいひおこせたるいとうれし」と、書きことば世界への記述につながって行く。過去の人とは、書物というふみでつながるが、現実の人とは、ふみのやりとりができる。手紙の効用は、そこにあるのである。

15段では、ちょっとした旅に出ることの楽しさを「いづくにもあれしばし旅だちたるこそめさむるこゝちすれ。其わたりこゝかしこ見ありき。ゐなかびたる所山里などは。いとめなれぬ事のみぞおほかる」と述べる。そして、続けて、「都へたよりもとめて文やる。其事かのこと便宜に忘るな。などいひやるこそをかしけれ」と、手紙を書く楽しみを述べている。

また、29段には、過去をなつかしむ心が書きつらねてあるが、「人しづまりて後ながき夜のすさびに。何となき具足とりしたゝめ。残しおかじと思ふ反古などやりすつる中に。なき人の手ならひ画かきすさびたる。見出たるこそ只そのをりのこゝちすれ」とある。これは、今現に何かを運んでいる手紙の場合とはまたちがう、書きことば一般のことになるが、その「残る」という効用、残った物が運ぶ心について述べている。その効用は、今は亡き人の場合に特にあわれな力を発揮するが、それは故人の場合だけとは限らない。「此頃ある人の文だに久しく成ていかなるをりいつの年なりけんとおもふは哀なるぞかし」とあるように、改めてその人をなつかしく思い出させる力をもっているのである。

6.3　社会的流通回路

兼好は、すぐれて社会心理学的な関心をもっていた人である。50段の、伊勢の国から「女の鬼になりたる」をつれて上京した者があるということから始まる話は、兼好のそういうことへの関心の深さと、観察眼のたしかさを、いかんなく示したものである。この噂にほんろうされて約二十日、京、白川辺の人が、

どんなに右往左往したかが、手にとるように描かれている。そうして、だれもが、どこでも真実をつかめないためにいら立ち、「暮るまでかく立さわぎて。はては闘諍おこりて浅ましき事ども有けり」という、巷の人の、実にそれらしい姿がとらえられている。

さらにおかしいのは、「その比おしなべて。二三日人のわづらふ事侍しをぞ。かの鬼のそらごとは此しるしをしめすなりけりと云人も侍し」という結末である。評論家は、頼まれなくても、どこにでもいて、ありがたい分析をしてくれるものだということを、こんなによく示す記述は、他にないのではあるまいか。

伊勢の女鬼は、事実で、デマの伝わりかたを描いたものであるのに対し、兼好が、その観察眼を、もう一段内面化して働かしているのが73段の叙述である。「世にかたりつたふる事。まことはあいなきにや。おほくは皆虚言なり」と、まず言い切る。なぜそういうことになるかという疑問にこたえるのが次の記述で「あるにも過て人は物をいひなすに。まして年月すぎ境もへだゝりぬれば。いひたきまゝに語なして。筆にもかきとゞめぬれば。やがて又定りぬ」と説く。人間は元来ものを大げさに言う本性があるというのが出発点である。これは、人間の目に見える景色は、景色そのものではなくて、目に映る景色の映像であり、それを心が解釈しているものだとか、その心には、必ず期待する働きがあるとか、人間の言語は事実を自動的に写し取るようにはできていなくて、心というあやしげなものが幻想もまじえながら作っている、勝手なラベルである、とか、いろいろの意味をこめているだろう。この本性が、話が人から人へと語りつがれる間に増幅されて、しまいにはとんでもないデマになること、それが書きことば化されると、そこで定着し、そうなったものが後代に伝わって行くという過程を、恐ろしいほど確かに見ているわけである。

その間に処する各個人がいるが、それには、こんなタイプがあるという。

①すぐばれるのも構わずに、口にまかせて言いちらす人

②自分でも本当とは思っていないのに、人が言ったことを得意になって言いひろめる人

③いかにも本当らしく、所々、不確実な所をまじえ、ここはよく知らないなどと良識のあるふりをして、全体のつじつまは合っているように話す人

①は、すぐうそだとわかるから、罪がない。②は、人のうそをかつぎ回って主体性がない。③は世をまどわす最も悪質なデマゴーグであると、兼好は、とらえている。

そして、だれでも、そらごとが自分に関係していて、しかも、自分に有利に

流れているときは、うそとわかっていても否定しないものだとか、また、うそだと知っていることを聞いている時には、こちらがものを言うタイミングがむずかしいという。わざわざ口を出して否定するほどでもないと思って消極的に聞いているときに、急に水を向けられて、一瞬たじろいでいるうちに証人にされてしまう、というようなめぐり合わせになることもある――こんなふうに、この段は読みとれる。

7.　言語の注釈機能について

このことについては、つれづれ草の中に、実にたくさんの記述がある。有職故実にふれて、何が正しく、何が間違っているかを指摘した文章が、ことに終りに近づくと、多くなる。これらの記述について研究することが、つれづれ草研究の非常に大事な面を作ることは確かであるが、私は、このことについて、全く知見がない。

小松英雄氏の新著『徒然草抜書』(昭58　三省堂) には、この方面から攻めた論考の、稀に見る深さが見える。例えば、私が、ここでただ、「言語作品への注目」ということで扱ったにすぎない「秀句」の問題（三井寺を焼かれて「寺法師」がただの「法師」になった話など）が、大変深くえぐられている。ぜひご覧になるとよい。

結　び

つれづれ草の中に兼好の言語行動論をさがして読み、今いちばん感じていることは、「つれづれ」ということばの意味を正しく知ることが、つれづれ草を知り、兼好を知るために、やはり、いちばん大事なことらしいということである。

〔引　用　文　献〕

1.　Roman Jakobson : Linguistics and Poetics 1960
(Thomas A. Sebeok 編　Style in Language. MIT Press)
2.　Dell Hymes : The Ethnography of Speaking 1962
(T. Gladwin, Wm C. Sturtevant 編　Anthrophology and Human Behavior, ワシントン人類学会)
3.　J. L. Austin : How to Do Things with Words 1962
Oxford University Press

4. 時枝誠記：『国語学原論続篇』1955 岩波書店
5. 北村季吟著 鈴木弘恭訂正増補：『徒然草文段抄』1894 青山堂
6. 小松英雄：『徒然草抜書』1983 三省堂